

心理学教育・研究に役立つCourse Credit制の導入と評価(2)

－ 4年間の運用実績とアンケートによる評価－

松井 孝雄・水野 りか・松尾 崇史

1 はじめに

学部段階での心理学教育において、授業のほかに実験や調査に参加して実際の研究を体験することは非常に重要である。また、卒業研究や教員の研究の実験や調査の対象として学部学生は欠かせない存在である。しかし、大学入学者の層が厚くなって多様化したこともあり、このような活動への十分な自発的参加は残念ながら必ずしも期待できなくなりつつある。そこで中部大学人文学部心理学科では、実験・調査への参加や講演会への出席などの活動に対して与えられるコースクレジットの取得を単位取得の条件として求める制度を2005年度春学期に開始した。また、実験参加予約やクレジット取得状況をウェブ上で管理できるシステムを開発し2005年度秋学期に導入した。前報(松井・水野・松尾、2008)では、導入にあたって参考にしたオハイオ大学のものにあわせて制度およびシステムの内容を紹介し、本学科における2年半の運用実績とアンケートによる学生の評価について概要を述べた。本稿では4年間の実績について具体的なデータをもとにまとめ、アンケート結果についてもより詳細に検討する(そのため、一部前報と重複している部分がある)。

2 制度の概要

この制度では科目ごとに担当教員の判断で一定量以上のクレジットの取得を単位取得の条件にできる。また、実験・調査など、クレジット付与対象活動の種別を限定した指定もできる。通常は単位取得の必要条件であって評価の対象にはならないが、授業によっては学生がクレジットを指定数より多く取得した場合に成績評価の材料としてもよい。これらの条件は必ずシラバスに明記されることになっている。

クレジットは同一学期の複数科目で共通に利用可能である。したがって、通常はある学期に履修している科目のうち最大のクレジット数を要求している科目の分だけを取得すれば足りることになる(活動種別が指定されている科目が複数ある場合はこの限りでない)。現在の心理学科のカリキュラムでは、必修の演習の条件として春学期・秋学期ともに1年次生は7クレジット、2年次生は6クレジットの取得を義務づけられている。他に3年次のゼミで5クレジットの取得を指定

しているものが1/3程度あり、それ以外の科目では2割程度が5クレジットを指定している。

コースクレジットの付与対象となる活動と、それによって付与されるクレジット数は以下の通りである。ただし、実施されている実験数が少なかったために希望しても参加できずにクレジットが足りなかったような場合の特例措置としてレポート提出などの課題による取得を認めることがある。

- ・心理学実験への参加(30分未満は0.5、30分以上は1.0)
- ・心理学調査への参加(0.5～)
- ・心理学実験・調査の実施補助(内容に応じて)
- ・講演会(心理コロキウム)への出席(1.0)
- ・学科主催シンポジウム等の手伝い(1.0～)

3 運用実績

コースクレジット制度を開始してから約4年半(9 Semester)が経過し、入学時点から制度を経験した最初の学年である2005年度入学生が既に卒業している。カリキュラムでいえば完成年度を迎えたことになる。この間、制度の施行やシステムの動作に特に重大な障害は発生せず、順調な運用が続けられてきている。

Semesterごとのクレジット付与対象活動実施件数を表1に示す。学生が必要とするクレジットをすべて提供できるだけの活動はおおむね安定して実施されているが、実験に関しては時間がかかるうえに一度に一人しか参加できないものが多いこともあって不足気味である(後述のアンケートの結果にもそれは不満となって現れている)。表からもわかるように徐々に改善の傾向はみられているものの、今後の検討課題である。

また、学生の入学年度ごと・Semesterごとのクレ

表1 Semesterごとの実施活動件数

学期	実験	質問紙	実験者	講演	その他	計
2006春	17	28	2	4	4	55
2006秋	16	55	1	3		75
2007春	22	32	6	4	1	65
2007秋	20	48	4	3	2	77
2008春	20	29	6	4		59
2008秋	24	40	1	3		68
2009春	39	32	4	4		79

ジット取得数の平均を表2に示す。必修科目でクレジット取得が全員に課せられているのは1年次（7クレジット）と2年次（6クレジット）であるが、どちらの学年でも必須クレジット数をかなり超えて取得している学生が多いことがわかる。制度開始当初は必要なクレジットを取得してしまうとそれ以上何もしなくなる、つまりクレジットによる外発的動機付けのせいで内発的動機付けが低下する可能性も危惧されていた。しかし、必要数を大幅に超えてクレジットを取得する学生がこれほどに多く、しかも最初のセメスターばかりでなく2年次までその傾向が続くことは、そのような懸念はかならずしも当たらず、むしろクレジット制度が活動への積極的参加のきっかけとして機能している可能性を示すものといえるだろう。

3年次以降はゼミや履修科目によってクレジット取得を必要とする学生とそうでない学生がいるため、取得クレジット数が少ないわりには標準偏差が大きい。

クレジット種別としては質問紙調査への参加による取得が一貫して多い。調査そのものの実施数が多いのに加えて、実験に比べるとあまり負荷が重くないため

であると考えられる。当初は1としていた質問紙調査のクレジット数を2006年度からは基本的に0.5にしたが、偏りは解消されていない。どのような活動にどれだけのクレジット数を与えるのが妥当かを決めるのは難しく、いまだ懸案事項である。なお、授業によっては上述のように「5クレジットのうち2クレジットは実験参加で得ること」のようにクレジットの取得内容を制限してこの問題を回避している場合もある。

クレジット制度開始以前には実験や調査は個別に行なわれていたため記録が残っておらず、具体的に比較することはできないが、制度開始によって明らかに変わったのは以下の2点である。

- ・参加者を集めることがかなり容易になり、特に卒業研究を行なう学生の負担が減った。以前は授業等で用紙を回覧して参加を依頼することが多かったが、結局ほとんど参加が得られない場合がしばしばであった。しかし現在ではシステムへの登録後すぐに予約枠が埋まってしまうことが多い。必修科目でクレジットを課しているのが当然ともいえるが、一部の学生の意見によれば、参加することによって実験や調査

表2 入学年度・セメスターごとの平均取得クレジット数

入学年度	セメスター	年次	実験	質問紙	実験者	講演	その他	合計	合計の標準偏差	最大
2003	2006春	4	0.35	0.44	0.58	0.73	0.93	3.02	3.10	11.50
		2006秋	4	0.49	1.13	0.03		1.64	1.52	8.50
2004	2006春	3	0.92	1.48	0.23	1.18	0.12	3.94	2.91	12.50
		2006秋	3	0.87	2.49	0.12	0.43	3.90	2.51	9.50
	2007春	4	1.13	0.78		1.04		2.94	2.49	8.00
		2007秋	4	0.92	0.89	0.02	0.36	2.20	2.51	8.00
2005	2006春	2	1.42	4.24		1.58	0.18	7.42	2.28	13.50
		2006秋	2	0.66	9.05		0.07	9.78	3.41	18.00
	2007春	3	0.93	2.22	0.33	1.07	0.05	4.60	2.17	8.50
		2007秋	3	0.90	2.25	0.13	0.47		3.75	2.05
	2008春	4	0.47	0.79		0.12		1.38	1.61	7.50
		2008秋	4	0.89	0.98		0.14		2.01	1.02
2006	2006春	1	2.89	4.93		1.49		9.32	3.09	16.50
		2006秋	1	2.10	8.93		0.34		11.37	0.85
	2007春	2	2.54	3.95		1.79		8.28	2.46	14.50
		2007秋	2	1.30	6.18		0.61	0.20	8.29	3.32
	2008春	3	1.14	2.62	0.35	1.11		5.21	2.89	18.00
		2008秋	3	1.27	2.70	0.25	0.62		4.84	3.05
	2009春	4	1.40	0.71	0.06	0.29		2.46	3.15	12.00
2007	2007春	1	2.21	8.00		1.53		11.74	3.61	18.00
		2007秋	1	1.91	6.91	0.01	0.89		9.72	3.78
	2008春	2	2.50	4.72	0.04	1.93		9.18	3.13	15.00
		2008秋	2	1.54	6.18		1.43		9.14	2.97
	2009春	3	1.83	2.20	0.30	1.54		5.78	3.41	15.50
2008	2008春	1	3.28	6.38		2.35		12.11	3.90	18.00
		2008秋	1	2.03	7.26		1.51		10.79	3.73
	2009春	2	3.12	2.81		2.78		8.71	2.96	16.00
2009	2009春	1	2.36	6.59	0.02	1.68		10.66	2.07	15.50

注) セメスターの期間中まったくクレジットを取得していない学生は除いて集計してある。

また、期間中にクレジットを取得した学生数が10人未満の学年は数値にあまり意味がないため表示していない。

への興味が生まれて（あるいは、少なくとも参加への抵抗が減って）別の実験・調査への参加に積極的になる場合もあることが伺われる。これはクレジット制度のたいへん望ましい成果であり、実際に研究参加への意欲にどのような変化が生じたのかについて今後調査を試みたい。

- 実験参加予約者の欠席が減った。クレジットシステムにより前日夕方・当日朝・実施5分前にリマインダメールが送付されることと、連絡なしに欠席するとペナルティとしてクレジットが1減らされることによる効果であろう。2006年春学期から2009年春学期までに実施された実験の通算での欠席率は2.6%であった（場合によるが、制度開始以前には欠席率が1割を超えることも珍しくなかった）。

学科主催の講演会（「心理コロキウム」）へのクレジット制度開始翌年からの参加学生数を表3に示す。2004年以前のコロキウムの参加学生数は数人からせいぜい10人程度であったが、制度導入以降は明らかに10倍以上に飛躍的に増加した。このため外部からの講演者も積極的に招きやすくなり、より幅広い分野をカバーする講演会として充実しつつある。一般にこうした学科主催の講演会の参加者を募る際には特定の授業科目の出席としてカウントする方法を取ることが多いが、複数の科目に共通するクレジットの対象としたうえで学生が興味に応じて参加する方法のほうが積極的な参加が望めるのではないと思われる。もちろん、それでもクレジット集めのために仕方なく参加する学生によって聴講態度がやや低下することは否めないが、授業で

は聴けない話題に興味を持ったり卒業論文のヒントを得たりする学生もいることを考えれば、全体としては利点のほうが大きいのではないと思われる。

なお、これまでの実績からみて、クレジットが不足したために不合格になる学生はほとんどいない。たとえば1年次に必須クレジット数7を取得できなかった学生は例年1割に満たない程度であるが、そのほとんどが必修科目であるフレッシュマンゼミにおいて出席不足により不合格になっており、しかも出席不足による不合格者のほうがクレジット不足者より多い。したがってクレジット制度がフレッシュマンゼミの単位取得の難度を上げたとはいいがたい（2年次の「プレ心理学演習」についても事情は同様である）。逆に、クレジットを指定数より大幅に超過して取得した学生に対して、採点の補助情報として加点することはいくつかの授業で普通に行なわれている。

総じてみると、研究実施の推進、学生が実際の研究や講演に触れる機会の増大、授業評価への追加材料の提供など、コースクレジット制度の利点として想定されたものはほぼ実現されることが4年間の運営で実証されたといえてよいであろう。

4 学生へのアンケート調査

以上のように、スタッフから見ると本学科のコースクレジット制度はほぼ成功裡に運営されていると思われるが、もちろん本来の受益者である学生からの評価も問う必要がある。そのため、クレジット制度に関わるアンケートをこれまで数回実施してきているが、こ

表3 「心理コロキウム」の記録

回	講演者（所属）	実施日	参加学生数
35	湯川進太郎（筑波大学）	2006年4月26日	121
36	加藤 司（東洋大学）	2006年5月31日	97
37	梅田 聡（慶應義塾大学）	2006年6月28日	139
38	横地早和子（名古屋大学大学院）	2006年7月12日	38
39	小川 浩（中部大学）	2006年11月21日	24
40	西口 利文（中部大学）	2006年12月6日	18
41	丹羽 智美（名古屋大学大学院）	2007年1月10日	34
42	阿部 晋吾（梅花女子大学）	2007年5月9日	89
43	林 創（京都大学）	2007年5月23日	126
44	開 一夫（東京大学）	2007年6月6日	161
45	伊藤 君男（愛知学院大学大学院）	2007年7月17日	66
46	坂田 陽子（愛知淑徳大学）	2007年10月26日	133
47	澤田 匡人（宇都宮大学）	2007年11月22日	42
48	舟橋 厚（愛知県心身障害者コロニー）	2007年12月5日	23
49	伊藤 崇達（愛知教育大学）	2008年5月7日	112
50	脇田 真清（京都大学）	2008年5月28日	184
51	大塚さと子（名古屋大学大学院）	2008年6月25日	148
52	清河 幸子（中部大学）	2008年7月9日	112
53	吉住 隆弘（中部大学）	2008年10月22日	108
54	平井 真洋（生理学研究所）	2008年12月10日	140
55	高比良美詠子（中部大学）	2009年1月14日	111
56	松香 敏彦（千葉大学）	2009年6月3日	152
57	實藤和佳子（大阪大学）	2009年6月24日	151
58	榊美 和子（産業技術総合研究所）	2009年7月1日	157
59	加藤みわ子（愛知淑徳大学大学院）	2009年7月8日	151

ここでは「完成年度」を期にもっとも大規模に実施したアンケートの結果を分析する。

4.1 方法

実施時期 コースクレジット制度開始後3年8～9か月が経過した2008年12月から2009年1月に実施した。

対象 中部大学人文学部心理学科在学中の全在学学生を対象とし、247の有効回答を得た（回収率は約68%）。

質問項目 コースクレジット制度の意義、クレジット付与の対象として適切な活動は何か、クレジット管理/実験予約システムに必要な機能は何かなどを含めた30項目であった。7段階評価（1：まったくそう思わない～4：どちらともいえない～7：まったくそう思う）を求めた項目については表4に示した。それ以外の項目については後述する。

表4 アンケート結果（2008年12月～2009年1月調査）

項 目	回答者の入学年度(在学年数)・有効回答数									
	2008(～1年) N=53		2007(～2年) N=77		2006(～3年) N=45		2005(～4年) N=65		～2004(4年～) N=10	
1 クレジット制度は心理学の幅広い学習に有効である	4.96	(1.40)	5.36	(1.20)	5.38	(1.19)	5.55	(1.41)	6.00	(0.82)
2 クレジット制度は卒論生や教員の心理学の研究に有効である	5.85	(1.32)	6.35	(0.90)	6.58	(0.84)	6.40	(1.09)	6.60	(0.97)
3 来年度以降もクレジット制度を設けるべきである	4.43	(1.88)	5.26	(1.53)	5.51	(1.73)	5.95	(1.46)	6.40	(0.70)
4 クレジット制度は心理学に限らず、大学における学習に有効である	4.83	(1.44)	4.78	(1.23)	4.98	(1.25)	5.19	(1.52)	4.40	(1.71)
5 他学科もクレジット制度を設けるべきである	4.74	(1.67)	4.30	(1.48)	4.53	(1.50)	4.64	(1.53)	4.20	(2.04)
9 被験者としての(教員の研究目的の)心理学実験への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.49	(1.03)	5.90	(1.15)	5.98	(1.25)	5.94	(1.10)	6.30	(0.95)
10 被験者としての(卒論のための)心理学実験への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.68	(1.00)	6.14	(0.84)	6.18	(1.03)	6.23	(0.93)	6.30	(0.82)
11 被験者としての(学生の実習のための)心理学実験への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.53	(1.15)	5.87	(0.98)	5.78	(1.17)	5.97	(1.10)	6.10	(1.60)
12 質問紙への回答による(教員の研究のための)心理学調査への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.62	(0.95)	5.99	(1.03)	5.98	(1.14)	5.98	(1.20)	6.40	(0.97)
13 質問紙への回答による(卒論のための)心理学調査への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.79	(0.91)	6.22	(0.77)	6.22	(1.02)	6.12	(1.22)	6.50	(0.71)
14 質問紙への回答による(学生の実習のための)心理学調査への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.72	(0.97)	5.87	(1.00)	5.82	(1.28)	5.92	(1.16)	6.30	(1.06)
15 心理コロキウムなどの講演会への参加はクレジットの対象としてふさわしい	5.32	(1.22)	5.86	(1.22)	5.67	(1.77)	6.12	(1.24)	5.50	(2.17)
16 心理学実験の手伝いはクレジットの対象としてふさわしい	5.45	(1.29)	5.59	(1.38)	5.87	(1.36)	5.72	(1.33)	5.10	(1.66)
17 シンポジウムなどの学科主催行事の手伝いはクレジットの対象としてふさわしい	5.00	(1.37)	5.12	(1.48)	5.31	(1.70)	5.54	(1.42)	4.60	(1.84)
18 教育に関するアンケートへの回答はクレジットの対象としてふさわしい	5.28	(1.38)	5.08	(1.49)	5.71	(1.58)	4.89	(1.59)	4.60	(2.01)
19 本を読んでレポートを提出するなどの補助課題はクレジットの対象としてふさわしい	4.37	(1.56)	4.58	(1.63)	4.29	(1.71)	4.20	(1.62)	4.80	(1.62)
23 パソコンで実験参加予約ができて便利だ	6.10	(1.40)	6.13	(1.09)	6.29	(1.10)	6.36	(0.90)	5.90	(1.85)
24 携帯電話で実験参加予約ができるとよいと思う	5.79	(1.35)	6.03	(1.52)	6.16	(1.62)	5.83	(1.56)	5.90	(1.29)
25 パソコンで実験参加予約のキャンセルができて便利だ	6.09	(0.97)	5.97	(1.13)	6.22	(1.38)	6.30	(0.85)	5.70	(1.95)
26 携帯電話で実験参加予約のキャンセルができるとよいと思う	5.87	(1.24)	6.13	(1.38)	6.20	(1.62)	6.05	(1.46)	6.00	(1.33)
27 現在までに得たクレジット数がかかるのは便利だ	6.70	(0.57)	6.70	(0.54)	6.73	(0.62)	6.74	(0.68)	6.90	(0.32)
28 今までに参加したクレジット対象の活動の履歴がかかるのは便利だ	6.43	(0.82)	6.30	(1.06)	6.44	(1.10)	6.47	(0.85)	6.80	(0.63)
29 実験の日時が近づくともメールで通知されるのは便利だ	6.55	(0.77)	6.39	(1.19)	6.49	(1.14)	6.70	(0.64)	6.40	(0.97)

注) 数値は7段階評価（1：まったくあてはまらない～7：まったくあてはまる）の平均値で、かっこ内は標準偏差。6以上または4.5未満の値に色をつけてある。全30項目のうち、ここにはないものは7段階評価以外の形式であった（本文参照のこと）。

(必須クレジットが増えなくても自発的にさらに多くの活動に参加することは自由なので、この理由づけはややおかしいともいえなくもないのだが、より多くの活動参加に対するインセンティブが欲しいということなのかもしれない)。

なお、クレジット制度の意義に対する評価とクレジット付与対象活動への参加状況に関連があるかを調べるため、2008年度のクレジット取得数と項目1-5への評価の積率相関係数を学年ごとに求めたが、まったく有意な相関はみられなかった。つまり、制度を高く評価する学生がより積極的に参加しているとは限らないことになる(ただし、評価がかなり高いところに集まっているため相関がみられにくかった可能性もある)。

4.3 付与対象として適切な活動について

表4の項目9から19がこれに該当する。これについてはあまり目立った傾向は認められず、現在実施されている活動のほとんどがほぼ適切なものとして評価されていることがわかる。「20 その他、クレジット制度の対象にすべきだと思う活動について自由に記述してください」という自由記述項目も設けられたが、これにもほとんど回答はなかった。対象活動については現在のままでほぼ問題ないということであろう。

ただし、わずかな差ではあるものの、項目9および12への評価が項目10および13への評価より低いことは興味深い。卒業研究への参加がクレジットの対象になるのはよいが、教員の研究への参加はそれほど適切とは思わないという意見をもつ学生がいるわけである(自由記述項目にはっきりそう書いた回答もみられた)。項目7や項目8に対していくつかみられた「クレジットを集めるのは大変だが、この制度がないと卒業研究が大変になる」という趣旨の回答とあわせて、体験による学習の充実を図るものというよりは学生間の労力提供による互助制度のようにクレジット制度を受け止めているむきがあることをうかがわせる結果である。もちろんそれをそのまま悪い傾向とはいえないわけだが、制度の趣旨がスタッフの意図と異なって理解されることが、期待される効果を実現する妨げになっていないかどうかは注意深く検討しなければならないだろう。

4.4 システムの機能について

表4の項目23-29が該当する。現在のシステムはほぼ好意的に評価されていた。また、携帯電話による実

験予約・キャンセル・クレジット管理機能を求める意見はかなり多くの学生からみられた(システムの機能についての要望を問う自由記述項目への回答もほとんど携帯電話に関するものだった)。携帯電話対応システムは現在テスト中であり、近く本運用を開始する予定である。これが順調に運用されればさらに評価は高くなるものと期待される。

なお、実験数が不足のため思うように実験予約ができない問題と関係して、「予約できる実験が登録されたらメールで通知するサービスを提供してほしい」という要望もかなりみられた。教育向けの制度においてそこまで親切なサービスを提供すべきかどうかは必ずしも自明ではないと考えるが、ネット上のサービスを提供する以上は他のネットサービスと比較されて要求や批判を受けることもやむをえないのかもしれない。

5 おわりに

4年間の運用結果のデータとアンケートの結果をあわせて検討した結果、心理学の学部教育におけるコースクレジット制度の有用性のある程度客観的に示すことができたと思われる。また、学生からの評価を検討するときには学生にとってその制度がどのように現れたものなのかを考慮しなければいけないという点や、制度の趣旨はスタッフが意図した通りに受け取られているとは限らず、そのことが効果に及ぼす影響についても考える必要がある可能性など、教育制度一般に関わる問題点も指摘できた。幸い順調のうちに出発できたクレジット制度を今後も引き続き発展させつつ運用し、同時にその実践にもとづいて教育制度の導入や改善についての考察を進めていく予定である。

引用文献

松井孝雄・水野りか・松尾崇史(2008). 心理学教育に役立つCourse Credit制の導入と評価(1)-Ohio Universityでの運用方法を参考に- 中部大学教育研究, 7, 19-28.

謝辞

本研究の一部は、中部大学特別研究費C(2005-2006年度, 研究題目「心理学実験管理およびコースクレジット管理システムの構築と評価」, 研究者: 松井孝雄)の補助を受けて実施いたしました。記して感謝の意を表します。

教	授	人文学部	心理学科	松井孝雄
教	授	人文学部	心理学科	水野りか
教育技術員		人文学部	心理学科	松尾崇史